

〈実践報告〉

生涯学習と古典教育について

Lifelong study of Japanese classical literature

亀田夕佳(Yuka KAMEDA)

一、生涯学習の意義について

中央教育審議会は平成20年2月の答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」において、国民一人一人の学習活動がいかに促進されるべきかについて指針を示した。ここでは、2011年度より愛知淑徳大学エクステンションセンターにて担当している古典講座の実践を手掛かりに、生涯学習について考えてみたい。

答申では「国民が生涯にわたって行う学習活動の支援の要請」として「経済の発展に加え、科学技術の高度化、情報化、少子高齢化等の進行を背景として、人々は、物質的な豊かさに加え、精神的な面での豊かさを求め、生涯を通じて健康で生きがいのある人生を過ごし、その中でそれぞれの自己実現を図ることを求めている。人々は自己の充実・啓発や生活の向上のため、多様な学習の機会を求めており、国民一人一人がその生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、また、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が求められている。¹⁾」としている。

本学のエクステンションセンターには、地域に開かれた学びの場としてさまざまな講座が開設されている。古典の講座については、受講者のほとんどが一般の方々であるが(過去に本学の学生受講者は1名)、まさに「精神的な面での豊かさ」や「生きがい」を求めて積極的に講座に参加しておられる。次に、具体的な講座の内容について示しておく。

二、エクステンションセンターでの古典講座について

これまでの講座で取り上げている内容は以下である。

- ①『源氏物語』入門——名場面をめぐって——(2011年度後期公開講座)
- ②丁寧に『源氏物語』を読む——光源氏の人生を中心に——(同春季集中講座)
- ③丁寧に『源氏物語』を読む——学ぶ女君を中心に——(2012年度前期公開講座)
- ④丁寧に読む——平安才女の文学と人生——(同夏季集中講座)
- ⑤丁寧に読む『源氏物語』——登場人物玉鬘に注目して——(同後期公開講座)
- ⑥ていねいに読む『源氏物語』——宇治十帖(前半)——(同春季集中講座)

①は「入門」とした。これには理由がある。2011年度前期、夏季集中にも「源氏物語を読む」として告知をしていたが、規定の人数が集まらなかったため、一般向けの講座であることを示すために「入門」と題してみた。すると、興味があるけれど遠慮してい

た方々にも参加してもらうことができた。後に受講者の皆さんに伺ったところでは、民間の「カルチャースクール」ではなく「大学」での講座であるため、予備知識がなければ理解できない専門的な内容ではないかと心配して申込みを躊躇したとのことであった。

こうした開講までの反省を踏まえて、②以下の題目には「丁寧に」を冠した。ここには「古典」に対して気負わずに参加してほしい願いを込めてある。また取り上げる作品は主として『源氏物語』を選んだ。日本を代表する大ベストセラー作品であり、マンガや映画を通して作品の名前だけは知られているものの、原文についてはほとんど読まれることのない作品である。それゆえこうした講座での学習が望まれるのではないかと考えた。

受講者数は、①の「名場面をめぐって」では5名であったが、②以降は、その5の方々から友人を誘ってくれたこともあり、12～17名となっている。今のところ全て女性で、世代も幅広い。

三、授業に際しての工夫

「生涯学習」として、古典を楽しむ方法はさまざまに考えられる²。このエクステンションセンターの講座では「丁寧に」とした文言の通り、まずはわかり易く解説することを目指した。ここではそうした工夫について述べる。

受講者の中には古典は中学や高校で一度目にしただけで、試験以後は全く縁のなかった方々もいる。中学や高校で古典の面白さに開眼できない理由の一つは、「古典文法」の習得にどうしても時間が取られ、肝心の意味内容にまで辿りつけないことにあるだろう。また日本語でありながら現代語とは違う言葉の意味や、建築様式や風俗習慣の違いなど、古典作品であるがゆえに、そこに写し取られた人々の心情を読み解く以前に越えなければならない多くのハードルが存在する（むろん、そうした困難さも古典を読む醍醐味の一つではあるのだが）。

本講座では、ゆったりと原文を味わうことを主眼とし、予習や復習をせずとも理解できるように努めた。五十四帖の長い長い物語をすべて扱うのではなく、「学ぶ女君」、「登場人物」など各期ごとにテーマを決め、一回ごとにプリントを作成した。プリントには主要な場面を取り上げ、時代背景や人物関係、言葉の意味について詳しく説明を施した。肝心の原文については、傍らに現代語訳を配し、内容が理解できるよう工夫を施した。また場面によっては作品を立体的な理解を促すために、近年研究が盛んになっている絵巻などを資料として積極的に用いた。

古典の特に『源氏物語』の文章は、後に藤原俊成により歌人必読の書とされるほど、「歌ことば」との関わりが深い。原文ならではの響きの美しさを理解するために、「音読」は欠かせることのできないものである。本講座では場面ごとに音読し、特に響きが美しく新古今集などに影響を与えたような箇所については、受講者の方々も一緒に声に出してみることを心がけた。そのため、プリントの文字は診やすいように大きなポイントにしてある。

また、名古屋市は「徳川美術館」や「熱田神宮」などがあり、平安時代から受け継がれ

てきているものを間近に見ることのできる環境にある。講座ではなるべくそうした情報を伝え、より充実した古典の理解につなげるよう努めた。具体的には徳川美術館での「国宝源氏物語絵巻」の展示と一月十一日に行われる熱田神宮での「男踏歌」を紹介し、講座の内容についても、そうしたものとリンクさせるようにした。特に熱田神宮の男踏歌は、「踏歌神事」として『源氏物語』にしばしば描かれるものでありながら、一般にあまり周知されていなかったため、改めて地元の文化を学ぶ良い機会になったようである。

四、今後の課題について

講座を担当させて頂いて嬉しかったことは数多くあるが、中でも受講生の方から「この物語に書かれていることが、他人事ではない現実にあることのような気がしてきました。」と言われたことは強く心に残っている。物語の登場人物は、いうまでもなく架空の存在である。だが作品購読を通じて、その生き様を自らに引きつけ、考えることこそが「感動する心、他人を思いやる心」の形成につながるのだと思う。

本講座では基本的に予習・復習を課すことはしていないが、結果的に多くの方々が何等かの予習・復習をして下さり、もっと深く知るためにどのような参考書があるのか質問を寄せて下さる。最近では活字ではなく、できれば写本に挑戦してみたいという要望もあり、次回からは少しずつ「くずし字」を取り入れてみようと思っている。

初心者向けの講座が数多く開講される現状については、「新しい文化の創造の可能性をいかに開拓できるかが、重要な問いとしてある。³」とする真摯な指摘がある。確かに難しい課題であるが、教育の結果は簡単に評価できるものではない。学ぶ意欲に対して誠実に向き合うことこそが教える側に立つ者の仕事であろう。

古典の作品が現代の我々の前にあることは、感動の連鎖の証であろう。はるか昔、千年以上も前に一つの文学作品が生まれ、その作品を面白いと感じた人々が誰かに伝えたいと思い、そのことが新たな読者に繋がり、さらに新たな感動を生んだのである。戦禍によって古典を失ってしまった国や、統制によって古典に触れることすらできない国もある。そうした感動の連鎖が途絶えることなく繰り返された結末に現代の古典教育が行われている幸せを思わずにはいられない。

以上、簡単ではあるが、エクステンションセンターの講座での実践を報告した。今後も生涯学習と古典教育について考えてゆくつもりである。

¹ 文部科学省HPより引用した。

² 菊川恵三氏は「生涯学習における古典指導——「古典再発見」——」（『日本語学』第26巻第2号 通巻第317号、平成19年2月）において、大学の教養教育での古典教育の意義について、「一度は学んだ古典について、実はこんな新鮮な見方ができるよということなのである。」とし、「再発見」させることだとされる。

³ 安藤徹「教育する『源氏物語』教科書と生涯教育」（立松和弘・安藤徹編『叢書・〈知〉の森5 源氏文化の時空』、平成17年4月）。